

12
以前より、右の胸痛は12.7にいた。

あつとき〇〇から、右胸の指痛を受け、病態
での検査を考えた。たが、12.12に受診する
所出来ずに1月11日に、さらに胸痛が、
体のたぶらから、日常生活に支障をきたすよう
に、7.4と、検査を行った。

そこで、CT撮影で、指痛を受けた右肺
に病変は見つかり(2つと①と②)。病変の
検査は加わった。病態は、悪性と思われず、
確定出来ずにいた。そんななかで、最近、再び、
CTを撮影したところ、①と同じ場所に見られた。(③)
この所、医師に話した。この①=②と場所
見ると、「過去」50歳の病変も存在し、その「おと」
に就いて、7.4のことも考えられたら、このこと、
体調は、回復した。

①と② M 同じ様でなすれ、それ M. "治、た" 者
 を 挿 17-18 まで入れたら、^② の前に "治、た" と
 になる。 かつとせ、 何と病歴2-7 治療 18.
 がある。 せせせ 病歴 にち M.M. 7 なる。

理想の 医療 を 見ると。 モオク- から 12 は 5 人
 た のう な 度 に 2 は 6 人 M. 「人間」 と 17 の 2 人
 での ち の 見方 から 拡大 17. この 世 の 原 理 原 則
 を 17 考 えて と。 この ほう は 身 ち ち 17 の ほう だ、

医療 を 否 定 する ほう だ 17 なる M. 科 学 2-6 たり
 手段 と 17 の 医療. 医学 と 17 12. この 平 本.
 動 17 17 なる ほう だ と 17 なる ほう だ を 融 合 17.
 考 えて 17 なる ほう だ の 大 切 さ を 身 に 17 なる ほう だ した。

兵庫

S.M

10/17.

以前より、右の胸痛が気になっていた。

あるときこう庵さんから、右肺の指摘を受け、病院での検査を考えた。ただ、なかなか受信する事が出来ずに日が経っていった。さらに胸痛や、体のだるさから、日常生活にも支障をきたすようになって、やっと、検査に行った。

そこでのCT撮影で、指摘を受けた右肺に病変が見つかり（この時を①とする）、細かい検査が加わった。病院では。悪性と思われるが、確定出来ずにいた。そんななかで、最近、再びCTを撮影したところ、①とおなじ像がみられた。（②）

この際、医師によれば、この①=②と像から見ると、“過去”何らかの病変が存在し、その“あと”が残っているものと考えられるという。このところ体調は回復してきた。

①と②が同じ像でみられ、それが、“治った”あとを指しているのであれば、②の前に“治った”ことになる。この時、何も病院での治療はおろか、そもそも病院にもかかってない。現実の医療を見ると、セオリーからははずれたような感じではあるが、「人間」としてのレベルでのものの見方から拡大して、この世の原理原則をして考えると、このような事もあるのであろう。

医療を否定するわけではないが、科学であったり、手段としての医療、医学とともに、この本来、動かしているであろう「力」といったものを融合して、考えていく事の大切さを身にしみるに至った。

平成 25.10.20

兵庫県在住 医師の S. Mさんの経緯の注釈を記します。

本人に、当方「こう庵」の病気の透視の結果で、「**右肺の下葉に癌の反応在り**」の情報を平成 25 年 4 月初旬にお知らせしました。

その後、本人は多忙の事もあり、なかなか検診に手間取っていたが、4 月 25 日に検診を受けて、その結果を 5 月 9 日に指摘通り「**右肺の下葉に 3 センチ程の癌**」が告知されました。

病院では、肺ガンは、転移性で更にその前の癌が在るはずとの見解との事で、更に当方の透視で大腸・S 状結腸の癌を新たに指摘する。

本人からは、下血等の情報は当方には全く知らせず、透視結果の指摘で以前から下血在りとの告白でした。つまり、癌でした。

依頼により平成 25 年 6 月 29 日より肺ガンと S 状結腸の天創気功療法により遠隔療法にて開始する。

遠隔は 1 日 3 回を毎日続行！（昼間、夜 22 時頃、深夜 3 時頃）

●当院の見解として

6 月 29 日～7 月 13 日までの約半月間、40 回位の遠隔療法の結果、僅かな固形物は残すものの、肺癌の反応が消滅する。直腸も同様である。

●**病院での検査結果**

その後、本人の病院検診にて 10 月 10 日ガンの消滅を確認される。

以上が S. M 氏のガン発見から消滅までの経緯です。

岡 孔庵